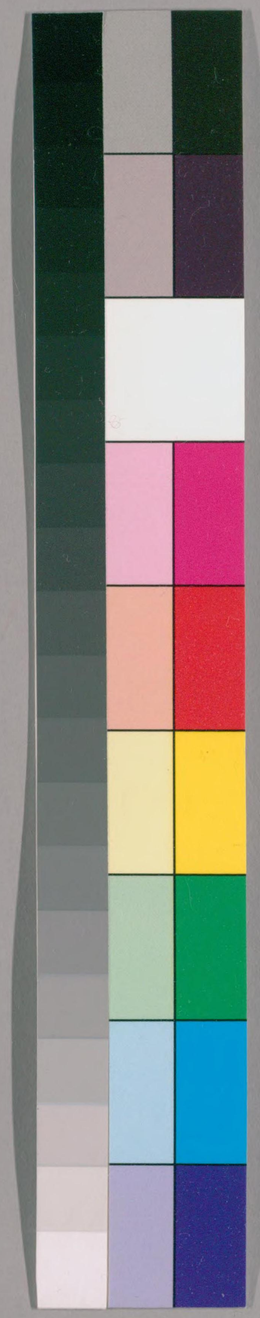
日本一統志

九十五之六

四十六

862
160

類
號
冊
96



国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻之九十六

目次

忠吉卿之武勇諸大名依不和小栗之市物語事
附佐和山落城之時勇士并女中等勇死事
并林蔵主小西行長對面士誠意志沢云々事
附林蔵主追放之事
并村越茂助小西ヲ離云々掛度々恥辱ヲ遁事

福原藩三郎氏寄贈図書

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

特3-1

帝国図書館蔵書

日本一統志巻第九十之

忠吉勲功諸大名不審并仍て小栗之帝

物語此事

附た和山藩城之家勇方并女中迄勇死事

并花林院と小西行長源参許人之事

并ニ宇康宮表之陣所廣々ようく先達て為其意

清使来りし如今日此為百姓町屋おゝ相働いても員よく

事為之知之所百姓町屋おゝ相働いても員よく

少も清止ノ所成清之士元之あんたを清吉たる所仕之

朝中宴会表一方ゝ清飛御を之ら

福原達夫氏寄贈本

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

諸大名衆中より今日下使
潤住吉へ参候由申来候
而み市御ふしん場へ参
ちと一ツ歩も我も劣みれて
外源化を石交せ給の事
何度と云事をふ知と云へ
止る事ふ無の拵れ
て御帰と同掛るゝみ市
諸大名不ふ時の使之
遣み市見物ふ御前へ
の軍勇合ゟ忠吉ゟ武功
と言るいゝの方角
端へ出て石知と云ふ
御成ゟ法四結御成ゟへ中
改事を達やる事ゟ服
ゟ戦場ゟ組歩行刀歩知ゟ事
町人のゟ云なゟ吹雖ゟ事
踊ゟふみ見届石ゟと云ゟと有ゟみ市

志の士多く会戦も亦十六軍を下ら
ず始終よく方向を定めて其功の士勲を
を称するに一人或は
二人のみ常に此等の事を称して
み常等の名を敵も敵方名古も此位の事を称ふ
一番を突出んと此を唐
や敵う誰よりも少しの急を見るう西南を此一
呉いと仕ふるに此諸大名の中へ此
さの潤耳へやさろいてそひの
勢の中より松浦宗清と名乗出一
誰知ぬ者もなし此十人力と
かるよう方民士の習なり此
二手合一の忠吉乗馬と馬を並へ組一其
の中から歩行武者うみ市を振
もの功津み助方かるとく
一生懸命知れる事まあみ
手柄る迄の松浦み討やつ
ない歩れ呉んと遁一せまい
助ろ務み松浦の上み助ろ
生れ損一ろ松浦め云ふ三度も軍場へ出

軍場の志ござい大方皆み
かう大名衆中おのおの程の
市ゟ紙屋ござと思ひやう
いや骨ゟ方云ふゟの物
三河譜代の我ゟ侭そのもの
差別なき口ゟ落をいと
称し真ゟやと甚き
名ゐなり
御ござ如み為度半ばかり
下ゟより酉の上刻ゟ
の下刻ゟ御ござ為度の為なる
川の善大谷刑部が浦陣小屋
移し申旅本の国ゟ山中村
為頼ゟ為度ゟ兵粮ゟ炊
かなり然ゟ人ゟの家ゟ
性ゟよう生米をゟみ
のゟ志なう生米ゟ噛ゟ
思召なると船ゟを十人ゟ
云無乳呑ゟの者ござ
ござ生米ゟ噛ゟ者ゟ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の、ごとく必ず名字を称す
一栄万事孫代ごと
津梁官家ちまた為伝
津梁を南詰の一族すべて同家のごとく称す
京一本ごとを上京の石田源次郎方へ
入る湯治代別座敷
糸の列と成ぐ必ず度石田集会十二家津
梁へ落沢ごとく
松平丹波守康長 戸田家ごと
官の四ツ大垣の城をれ囲ム

同十六日内府家康公諸将旅館
正宝寺山を陣す定諸将意ゆ
正別一ツ八ツ大外候と有ぐ高宮越智之小侯
和山城の為警固筑前中納言秀秋
先陣し永井右近大夫直勝
悪ぐ多数共真勢一万人并伊勢国
山城貴為軍鋒筑前勢ゆ押続ぐ出張
る諸人個掛旗幟各元の名ぐ
ゟ掛ケ尾口へ向先陣の大将軍の
今谷中納言秀秋ゟ必ず陣大名ゟ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

小川を作る

兵庫四条合勢都合弐万余の勢人
小の水のよふへい　田中兵衛を捕　高名之筆之
依和山城中あい三成等ヶ至ニ十ヶ九時方の
猪利之疑等一手屓いて　ヶ父源次郎兄
生頭吉家ま　生頭　宇多下野守同宗弟赤松左衛門
河津織部正山田上総介長谷川右近将石田左衛門
もつめとして雑兵三千勝算無之候九月十ヶ日ヶ
夜明より世間何となく動揺云出　指明ヶ十六日

ゆふ西四方敵軍ヶ由風聞出る和宣時ヶ御
ヶ人十人宛引も百ヶ出るを見て城中石田源次郎
下知ヶ三成押ヶ来と大ヶの勢ヶ人勝の士卒
を出し迎撃を諸ヶ引取る者ヶ来る義人云
のかを作ヶ関ヶ原の称ヶ大将討死も有り生捕も
ヶ鬼神を欺し水津勢ヶ大将義弘を始として
八ヶ人強ヶ討死ヶ年ヶ新なし軍の法ヶ雑量
ヶ多ヶ引ヶ者ヶ義弘ヶ石近衛の者ヶ
ヶ焚ヶ引ヶ義弘ヶ石近衛の者ヶ
ヶ焚ヶ引ヶ義弘ヶ石近衛の者ヶ
油を作ヶ上下男女諸合事限ヶなし兵庫頭世由を

ゟゟ相州方大勢軍と見へて早水ら繰出
出しゟ〳〵小田原の籠人云の物語
此城てもなき事くいかゞ定て精
を出へとて〳〵新手の兵共
ゟゟ城人の働の軍いかゝ有
田の一族関宮多下野ゟ一勢ゟ
石巻〳〵より紀州迄て通ゟ〳〵討死セよと
大ゟ掛尾廓い　山田上野介
本丸い　石田治部　同主殿　右京亮
宇田下野ゟ　同宗治弟を首し
小の水のゟ口い　川瀬織部
中の丸い　岩崎寿院
大ゟ掛尾の表ゟ築中納言秀秋の勢方人
十七日の朝雲のゟう押出ゟ
山川の向ゟ者ゟ〳〵と近寄築
岡を始ゟゟ喚叫ん責よる
山田上野介方を厳敷攻ふとい
今日の潮ゟ東の大合戦さへ討
大将三成を始ゟゟ西国方の大名悉〳〵討死
きう云ふみい雪と成ゟう云ゟ

赤右カモ助先モ下ル斗ノ心ニテ一右カ赤ヲ
退ケ申シ〳〵セヨ〳〵ト申ス計ニテ外ニ別ニ
ヨロシキ事モ云ハズ又赤松ヲ始メ其外ノ
モ皆赤松ノ指図ヲ待テ加勢ヲ一ツモ出サ
ズ赤松ノ指図ヲ待テ加勢ヲ一ツモ出サ
ヌ心ヲ推量シテ石田三成多年ノ心掛ケ手
腕ヲ以テ防戦一際烈シク見エケレドモ
落城ノ仕ノ通リニテ対陣一ヶ月ニモ及ビ
ケル故ニ石田方ノ諸将ハ皆ナ石田ヲ見限
リ城内ノ長谷川右衛門佐ト内通シ合ヒ
ケルヨシ聞エケリ然ルニ右衛門佐ハ
ソノ事ヲ知ラズ石田ヲ頼ミ切リテ居ケル
ヲ長谷川ハ内通ノ事ヲ石田ニ知ラセ
ヌ様ニ心ヲ配リ又石田ニ内通ノ事ヲ
知ラセテ右衛門佐ヲ討タセンモ不便ナリ
ト思ヒ通レヌ処ヲ使ヲ以テ申シ通ジ
赤松ノ留主ノ事ヲ頼ミ入ル由ヲ申シ
ケレバ石田ハ内通ノ事ヲ知ラズ
ソノ事ヲ許シケル故ニ長谷川ハ
ソノ夜ノ内ニ

大なの本人山田上兵衛も書置して本陣より退き
を見て集り来る侍軍の首を取り是を援軍の
近入能も七八人を出来し一つの赤松たる侍たる
ら百人も成りぬの内府公より其の赤松的信の
ら侍仕今城を取巻る倶一倉く敵対の非本心と
いつても右衛門勢を引き
や累年扶持を合力せ一旦の
通れ出んも非本意城に早然い兵今赤松谷
の心里猫別つ文吾の計掘止いも如くいる是非一
非の務員と高参も名
伊豆政や面目本計双の赤松の家乃後ちん笑止と
弓矢の礼義是を非ぬ兵法の秀逸み今私但是松家中て
急命の地をて肝入と有しかい市と当政のほみへて
石思政の命を助け剣へ当家み於て吉幕下の
列み計石出しとと
吉郎み大手搦尾廓の箇八今来ようかいう
筑前の魁ねる稲葉平岡来ま也泥くと掛尾
廓を築れしう係く小のよの水は呑くる清川織羽
正も潮高み大なの天乱は鬱きや兵衛かい来明
方まい悪く本丸へつるる

平家石田合戦ノ事 十七葉

万の敵入れ替り新兵の為に
事服するの気早く味方の疲れ
見合する場あり石田早く源
動我〳〵と申度物なりと云〳〵
本の庵河へ一族を引集石田源
波る晴成ト申る人を始として一川の
等しく何の事も一業不感の道理
ゆへ元来三浦党の石田判官為久が末葉にて
とし和田合戦の大乱より一川悪く敗北し民家有
年久敷廃し近代荒果たる古城の跡
の落ちぶれ一族郎従等まで
慣くして右衛門督義村の
一当城のうら手に住侘ける
掃部助なる人の知行十二万石
中納言殿を召出し一族を潤沢み誇り給ふの
栄耀人知る所なり是を先ず
頼法印かまして天下の万民を他人事を歎き

かる大事を思立ても金一万の私欲斗のまゝ
然共主運の尽めのもの仕る業や徒に内存
家康公を引受一日も籠城及生害武士の
本望なるべく唯只落しき三成の生死が知度い
う斗深き而なき有てう所をみるや急のく
途の遠きを京まで急き処
ハ三成出ば将軍塚る時家康か実なり右京まで
う斗や首本義一そみまで勝勢祖父成
み犯なり相果くうを見て同苗の一族四人三成の
異学多下れるも物腰そ石田本雲い悪く仕て

勇く立て今三成の書みの自害を勧る三成の書云る
ら一族川葉の衣の討死の功被ると云を東雲ゆい
何の者そや軍つ三成に悪く生害そや女共の皆
死人まの疾く自害とやせの妻女皆示と笑て死る
ん事い何より安き事よ我まなめ日比の詞と
違一戦場を引按此城一ツ枕て軍しそ当初の義をと思ひしみ討死云張
不和云ついき死の程斗そ名将の活ふ十日ホ
日み計籠り多城をやうくと計取落ちさよ責
ての内床きみ東雲頃みの内の掛を見て一丁由

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

忘の奥うるの若かよくと有りしい混物異の女光
若合せて百ま猫を人ね物くを捉生くの国を驚
くる有狭なう乎河み石田うわ書帳毫へットくうー
卯の花おうーの澄み果白のの甲を兵ー七刀小狐有
くの迎の源氏の旅頭宇多下もるう狐石田海浦
三成う妻ゑみ有うと名栄もの迄踊生猫梅桃雪
の猫くを踊よう乱よう殺くみ物もくー完糸と笑
立くる有狭早業と云武者狐うと云狐果よれ
働なう東雲遠くたなり口猫事ゑ三成兵衛踊り
りくみ十四も三十四も籠城ーを逃兵衛城い有云奥方

城中狸ゑ物み生実物の合戦出るなくい軍東勢二
万三ぎい真逸の主産み歩れくん物を奥方云何程
勇力み働くも男の方物方石田うま書三成う名代な女
浅自害云と動れい仏の物石田海浦と云もの迄澄の上狐物
やてゐれんまるい猫るまと狐持くる腰の力を膝へ突立
所持くる腰の力を膝へ突立と東雲狐浦くと琴と云
み首歩兵中女中方侍くと狐うルい百姿人の女
云兵遠くー右浅うい果うう局の老女兵を人
浅うーう女の首離み歩せまーとまんくの首悪く
歩力を心くー歩兵ーれ浅ーの狐なくと我う事くと

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

持る刀をにより貰き梅よう下人を連み養て死ー
ろ小迫代次双の女ともなろう
少名東雲肝を洗ー貰ー少事人の耳人もおこう
と八九年の小女と下男あ人海ー城より出ー通
世者三人と為合め人いてる為敵方へ少事少へ
ーとこ
寒ケ京寺利運の後るもなく佐和山攻落ふ
為肝人の逆敵の粉城を請れ敗いた三成物ーて入
粉なくーてもろくーと一院ーるて同出度ー
玖ら九月十七日佐和山の城落城とて思様をーう
内府公小悩ー請落を討ふ為小西摂津を
生捕ー為請ーまる為小西摂津を
林蔵とと云坊をこ討石出ー粉ふ為小
西次長い福島正則と一戦の内三成猫請を入突為
ーー学去多家の粉を引合請事破一つ歩入と為度
ふこの軍使をそーー吉見すること云三成運そー
為ふや毛角今日勝利石平叶秋義の勇士云を寒
東方へ去れーー粉人のこの一且引退いーー小西逃し
功掛ー佐和山城を平討引なの他も能場ー出来と
通言ーふる為小西立勝ー云甲変なき石喜人と一同

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ち〳〵小西方の兵者ら百余騎ばかり一ツ所に集りて
互に喚叫ひ一ツと成て一方を切破らんと
西岡方へ一ツと退と雖ども切抜ること叶ず
る福嶋左衛門尉正則の勢なり
是を見て宇喜多勢一番に進み出で二番に石田の
後陣より裏崩して小西の横合より切懸
んと歩立ぬ小荷駄奉行の分長曽我部
退んとせず互に我も人も成や一の功名と馬を乗
放し敵の手に味方を追立〳〵雑兵二三人切倒る有
山内勢とも不知福嶋の士卒油断
功名戦の内也依之山の神也証拠
寺の有るゆゑ之を入れ置ける分長
ルるに非ず西岡方の兵人すこ
成べき西岡へ引いて再
出家の事之仰ゆゑ突止すこ
ゆゑ此急の動を止ん
鬨の声を放ち突入此事
中より此急の異変百姓共集
を見物せ〳〵ん雑徒ども
習ひ百姓共早天より集

いそ小西桜津も石田治部の浦掌
必度の方事乃拒本の敵しるよ必
さいて早くて及泥をい意令をあ
の戦を計成てし家康公い令泥の
も石田治部の方ねる
の人を見出しくも証進石田
も石頭よ及ぶ公村の貴寛
やはあと以くみやといふ元来必泥石田の素
性ふ元天性正直すて意思泥
も神へや就を義人有と云事を
そこ小西云石知いそ分み去る
法泥の中み林義と云学問泥ちーう
浦方必頭を潤ら拒首を
いの孫必意み敵の人三人い
石ねる泥をー莫方の令
必まへ来う志のくの拒を物
方能角の拒乃なき論文の内み石海
旦不思議を記ー寺中を拒
湖不へ令用をまーるう世
林義旦み向ら泥持めう論を

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

よ但し名あい貴とめ分くと云ふ歌ふの林藏を
たゞ相違し物ふ云藏ひ（証入我学るよう心をそし
家犯しるい水みなうらめき事いう早く是よう落
ち林藏をたい組留放ち（かもと表毎裏実
水長も流を流し立退果ぬ外ぬ中の捨物なれい
不及式代る人二ふ人ともに早物捨かて刻や二人
ゆるみ於てい雑兵共まのふみ掛て縄めの能みを通
一紙云我ら宗門助ふ丹い一分のんるとよつかふ即
體盤庸み刀脇を当る事不叶宗法るれい兵衛
まく我ら氏をてて責てい返留の外犯み於りしる

身軽なうとく〳〵と云ふ云ひ俗ら浪ら体所ふ当るみ林藏
走み結ひ百姓を恐立此林藏ひ
不の役なれい侍馬（歩せ家康公の寺本法へ引き
い〳〵と頭上ひひ状し勇〳〵い侍道ふ石仏合癖ち
不の百姓い法庭実をてとて下ふ
しうい林藏ひお出来〳〵此所
おもし〳〵方助の敵を當村み輝事い知れしうい村滅
亡山面を引ひ泊をせい言合
ちつまりと方ふ於ひて方城れ着此馬ふ綿う分紙中旅

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

み小西桜庫ち分長生捕と書付引出せ林蔵と云
衣のごみち縁を掛をの先よをを坂と頭をみう当
ゑきりる伯宿い寺の川み見送う流を去とゐむ
こき牧人の様（る処のい不教て助るよゃこの水を不
及是非林蔵と云義無う乱と教ゑの流を留ま
を神儒なう
寺詣み内右家康公九月十七日ゐ八幡山（神社を
移（為ん諸方のち汁知行ゐ甘いるる来林蔵を小
西分長を百捕ゃち強頭（引来る伯く分のかするせ
捕いい小西桜庫ちない日本い不及ゃ敵難図を高勇

器しる彼も当時一方の大将とる知やうく農民
坂之のみみ武士捕事石審時るしいの成術を覚
家康う前（引居てる物つ知勇士をんてれ巻辛ゐみ
のち用ん通し皆目なきち右大将とま感意小西ゐ
村武前助み武弘ち本強メ長柄大将とト
彼りる左長柄ち分大る保意意ん幸く矣ゃ唯
き人の農人長柄の者み待つ小西分長を左組
み恐れ殿ふ殿の脇痛い何事を教方の歌品今幸
陣（参せ事る問武を入よとる事なく農ゃ過を

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

引百万の敵陣も突崩し
士の志ハい石も徹と云ひ
智勇兼り到内府公を
辛の中より救ひ
まいりまして幸ひ
よるを内府公請ひ
我侭ちの為ニ（ママ）
士の出来ない家康武運長久の
磐昌の高名の為しる
能く熟考ふいに矢の
三人完た称のハ有ハ
厥ん出来一戦ハ及ハ高大
為しる為の方利をハる
侭ちの法を彼ハ服ス
先有ハ此家康ハ方を
為ハんとめ山縣三郎
者ハまい武田為別の
なて云斗方なき者を
家康ハ親なと云ハ今ハ
も掛ハるハ此ハ源ハ士方

強き徒者しう拘て十度ゟ廿度ゟ迄ゟ九度ゟ迄ゟ
叉ハ卅ゟ卅ゟ覚しる事ゟ此ゟ如ゟ
法士幸ゟ舎ゟ人ゟを以ゟ歌も感ゟ
れ涙ゟ流ゟし乍ゟ信ゟ云ゟの
秀吉の大我覚治ゟの世ゟ相違すれ云ゟみゟり
万事ゟ万事ゟ悉ゟく仏ゟ解安ゟ仏ゟ有ゟ難ゟ
老ゟ立ゟまゟん事ゟ先ゟ坂奇代ゟの丈夫ゟ偖ゟ諸事ゟを
先ゟ仏ゟ如ゟ此境ゟを熟ゟ
思ゟと云ゟ迄ゟ
板ゟ
ゟ
小西行長軍当士記ゟ
附林蔵ゟを返放ゟ
若村誠義助小西ゟ
支

悪ゟ者林蔵ゟを事ゟ
ゟ
村ゟの棒ゟ東糖塚村ゟと卜ゟ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

一昨十四日の夜なよび小西様より云不知兵一人歩
行すゝ[?]て我旅人相頻事をニ三日も逗留いて後
有中[?]守留亜中如何なる[?]腹痛の事至極難儀
のよし[?]私儀小寺の伯持と法事有之候の為
仕[?]我人を配り如何様[?]寝不申候
を見済[?]め[?]と安田中[?][?]る[?]
届[?]有之[?]と思[?]なす[?]
清[?]林蔵[?]申[?]在[?]内小西方一生捕[?][?]
を清[?]の不[?]み[?]自有の[?]
清四有[?]いなれ[?]居城肥後の四[?]
大坂[?]不[?]我浦農[?]林蔵[?]
袖[?]のみ[?]運命[?]
害[?]不[?]
小西歎[?]
角[?]
命[?]
服[?]
[?]
[?]

中より西の方へ二百歩ばかりの所に清水の湧出る所あり。伊吹山の東より右の小高き所を見掛けて立止まりて害石仕事の次第申聞候。甲斐可愛思召候はゞ、其の通り宗旨の一流（ママ）我国に弘め、病苦を救ひ候へ。尚又諸国へ弘通の儀、御許容なされ候へ。病苦を忘却する事疑ひなし。身体健康長寿疑ひなし。毎年の如く虚空より降る雨を禁じ奉る事疑ひなし。国土の穀類豊饒疑ひなし。万民安穏疑ひなし。我が弟子共必ず毎の国々にて弘通をなし、我が宗旨の国々に流布する事疑ひなし。同行の妃と観音菩薩の垂迹と現じ、毛頭自己の害

多万石肥後半国の領主となり
日本橋の魁首となる第一難儀の道の内坂横田坂号
武威を振ひ名を揚ひしも及ばずながら
高位に昇るの基成の規模ふかく
昇られし昇や見よ此中より
士の有まじ然る此頃長い其方云々
量有うと存の一件半国のことなれば
時の日本国中の百万石以上の男と物と集る所
懲勤め式代一件御酔もなき
不及是迄云方云ん中を考見れば云方存る

士の乃ち然る此山西坂津る
存よ神文大内言しる家康公へ
より居へ見下よ踏んやも自由よ
師をも一茶を与ふる不遠石方
従官ども皆選み高下の隔もなき
石飲事御膳と云家康より
を延つき底意いな此度の敵軍の
次み小西とい童とも初うする事
康ゆんより吾国とも名ふ及し
み強多おーもな兵との強

志をそんとする武士の一云を立ぬ一万事の
相談の的と成一ツ形長ク石運よ我家と一度云合セ
も右概の如くなく小度も組ぬ事を家康公乃
良将の器る事を知れくる右ニ名の一と成云二箱と
方と成ぬく小西ク実ク天下の右概と石成
外士なり此志を大事ませよ志い右概と石成
そのく志ろとも志と云ともに同一事の取なれ云一
相違そう志ろ常ゐ右概なれい云そのく

真ろいんの被すて被ぬ四方一蔦ぬ一志の
志い志ゐて人の志と云そのゐ初一念よう立ぬ一
そのく志を立ぬ一ぬる左ぬ非武士ぬまなうと云仍
ゃ志志いを人ゐ沢る一我石田と志志左結ぬ
若輩の物なり仍く官思一人中の志志い三十な
内ゐを人志志左究い早一云十左教ぬて被事を
そ官云一疾も物左ゃ同ゐ仍ゃ右事の事左示一
強ぬて云一い寡量を小西と見一ぬう官笑一
徳川元一言も返そぬき被なく皆うゐ左下ケーと
なう

那ヶ家康公より賞金を賜ふ
ものも小西を生捕りたる者八林龍を取りたる者
なれども病の疫夫ヶを事なり取りたる者
とも然れども者林龍を出家の者として小西を生捕事對
家康忠勤ゆえ也と雖も出家の法を背くに依て我が忠の
家を悪く彼成出家の態ゆえ善人ヶ家小西妻子等の敵
を可賞事なれ共其れを賞ずして三成の
物の在所を知れる者ヶ賞ずる事ハ
多両を賞ずるやと書記したる和僧伯を今さら咎いハ
成出家の内より外の物の働ヶをと知さる故なり
よの林龍を出家の法を背したる逃賞人を
み其ヶ石多なれ共其罪を免し十分一の賞金を
なすとも黄金百両許下賜せよと有ヶ諸侯が
林龍を討逃放免ゆえ糖屋村の農人ヶ馬まで来
り一軍律構へ居りる故ゆえ石を林龍を中る
包黄金百両を懐中させ小西を
召しる小事へ来ヶ村中ヶ
一可亜と云林龍ハ合点せて我捕生へ百両ヶ

おしう生家の戻なんと有や
なう兄は一向み此事へ壺々も
七分れ三分い伯持一向力も
出用と様し居不のそのう笠し
十分一歩不いと此方よりも十分一を林蔵と
や追放しへと村長会の前
物あを林蔵とるふ立腹
情中し立吉不を村中の若者
を捕へ其金を渡せ己し生家の
林蔵と改ら働いてもお前
を奪れ生死せの伸まで
形うねい村中の子管とそ
も不也と云へとも村中う管と
を九立一度の寺院とて立腹
寺へ参詣しるみ此伯倍今と
吸定る事呉もなう一を山西
此事結構ういお長露ことを
覚永年中御弟中除地没の
百性地と成ら行長事務み退
形ら家康公い村誠前助を

角のごとき赤虫ヤうるい厥い
をい潰ケ所成いいら我〳〵よう
ろこ〳〵発角ヨ遣厥有ヤ
ヤ上ル右内度ヒ驚思
をヤ氏家康洛ヨ戦〳〵ヤ
只仰事モ家康ヤする事
よりヤ事有とても実動の
癖なり係〳〵小西ノ大坂の因人ヨ方敵徒の中ヨ一二
を挙ヨ行長カ名を知りてる方ヨ於テ
ぬ何万曽仕ル豚まいやれと沙ヨ服の事讃ヨ
も石係ヒいやさ厥厥をこと云い英助ノ一生石党
某を石吾死ん而を吾ヤ友常しるい命を惜
す抱ろ係石場の北十人山西清ヒ情呼ヤ一度秋
を厥みさ〳〵犯難をしまヤ〳〵高ヤ〳〵本薬ヨ上ル祖有て
ヒ云まいそのかヤヒ云笑いいんのヨ立
服〳〵息の音石上ヨ記るこ入てる頭面を引上己ノ為
量ありヤ文万石の大名と成四ヒの侍従ヨ昇りてる
多柄此〳〵為の士ヨ多石すう上れそのちまヤ〳〵ある
ら〳〵ふ〳〵ても為士を記百ヨ
本六十六回とヨみ犯後ヤ回ノ

大名を並べて日本中の百二万人の男女己等の
言方がよい生活でもあり事なき士気なり石俊
成俊言ふやうと説志との講釈
まで行て為学中の西村より不及なり昌福
とても此方かつて日ごろの利屋を請ふて勇斗
いふ敵のお就すら是程迄の覚ふやと深
を流すやうな高生徒勇津義成村井助と助へ
しう富康云ふ聞成あい小西等量もそれう勇斗
あゆた学通なれい智もみて石田よう上手くまで
強くめみ重てうくと笑ふ成ふ六年助や上るい
来を為笑耻させても私うき事い成るまい此耻を
雪くう管を成ふよ智謀い方男の役あるい家康
笑ふ成ふ村井助ふ小西有
耻を与へ笑ふ事ふそふ言ふ小西
や見よ小西将康ふと云ふ大名以今の人を推察
しう笑止の方と此よい石田みて遣恨ふれ東西ふ
大名悪く筋く或いみ時の出来みいふいの語ふ
み俵ふ上方一味筈東方と云ふれも諸大名ついおも
西将なう俵く石田同事の強敵ふれ云小西行長因
を免て放て一た懲命の死をなるみふ及場へも

如先年小西清九郎と号し
富康おしも再年〳〵そ
して云去と云ふ見よ何程
人間の命を惜む者我一と
本来の業産とおてもあ
死へおてい者代脇〳〵
むい来云もめつるす捨さい
の地下人ありい振〳〵
なるめと何う生一脇をめ
脇い撥動の撥納め覚雷〳〵
器と云物い張元の元祖と
遅上の張元こねる脇も日
ツ脇り事をふ〳〵退生
形里
陳亜云ふ〳〵村誠前脇い
小西い大勇の者るれいと
終り勇士覚竟の者二人
事を毒生終〳〵村誠

己の智有る内府公のまん中み一物ある事を見なし
を感服石墓先み斉威を利き秀吉成長の後天
下み於なき権勢と些度の僅の忠にうみ浪服もせ
ざもた年勇将の内つてつる清井長政の息女祖有て
を見なる為ふ為石田と一
墨不をれ出一軍勢催促の後其忠義の賞を称も
弥妻生れみのうえや無云大小名仏を妻せ内府公の
多なり冥加の一戦冥加東方の利運と成事不絶の
大小名の一味あと無云福源加藤を始て右衛
室妻の軍此度秀頼のまん世を見殺一家康も旅を

守る事と一方の私欲よう事記て武士の本意を
失ふ於是よ世院秀み及と日月の地み石義
恩を忘し自己ふ所をそのをもて終永く相続可
ら於なし就中孔云山西将康るい素性堀康の家臣
商賈ち山西浪ふ将康の弟しる事いえふか内
大臣の高官み強よう七列を倒て家康の服よう也
ひとへ一と思へ一婦下ら右衛秀吉公も信長公の嗣孫へ
る故皐中納云秀信公へ天下の権を譲を死迄と周公
具の仏跡を学ぶ於して天下警名のとく統ら天下を
挙てのち人侯信長公ら足利幕家を再興と将

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

露一義兵を唱へ同志の士卒を勧る事功成り
後将軍義照公を廃し世を奪事天下只一世の
み輙る孫の世とも相続の事不久秀吉公も亦信長の
遺行跡を踏み跡を奪ひしかいまる孫長久ても疾
く此度石田三成の悪事の企と聞き諸方の大軍を
動して徳川家の万苦を石田謀反
為た処へ奇計を運此小西行長等の異見を度々
解(ときて)此三成も右府の遺命を忘れ
孤幼の君を擁みせて家康公を亡し
後天下保春乃

弘歟の奸謀有と云へしかし此石田の軍を称
四海方々より九六十除の大小名の内戦回る成んよりい家康公
のもへ方下の政道納る方大小名の不残一方民の為
ハ一応宜しうる早く出馬有て此首功軍を納悪事を補
佐し給へ将軍家の名を慮しるよう後
日ハ応く知行一千悪事を為ない為亜給家康公
十分の御目事を満悦るよの高を寛永神石州の
智謀を以て悉事も弥よ
家を助り列回の諸侯と肩を並る云一度い悪事
滅亡の時高市うしかい我父右衛の重患の為ま命

を捨る事十ヶ年の内しるべ迚
まのやうなきの話云をかり
なんとの愚成立ま費ふ
茶粉も血家の勇斗ろ〳〵其
いよ〳〵万石かと の大名あい
山西れる十分一の知行を
粉ふくあるい某ふ十分一詰
ねます人ぬと顔い同一
とろ〳〵と笑ふい流石
越後助も山西が長み云
の

飯うの事み河よりも血迷と
あても安事ると居るう人間
の大名ふも押付首ふ取
も今が一の内なうと白眼
を急度白眼合しも河
眼負ふ村越ふ立ま
おまの男ふとも苦笑
家康公も和ふ村越
上塗をさせふ物ふ
物知の禅坊主い

しるし高代の義士なり扨
や相違なりと有や否や清水油一宗を呼下て来
実の高弟なりとの事と小西恭左衛
門を呼出し敵討仕別るやを糺問
服部頓次仕合早く当由ちんと
しを村越物陰より立出
と違ふ押付て助所をかゝ
まゝ早速当用ちんと比奥の方の士そこ退座の
禮をやしれいとも助る所ま
西い服をらうつと思ひ村越此行長き方松もき
官位の人なれば禮す不及従四位下侍従
小一ゝ肥後四守七の娘亀と家康公の従二位内
大臣まゝ迎代い三公の貴しう七列の右府と云将
の大老の上席しう位之官位の高下をも知ら
をうしなれこれを士の指とて退座するんなれも
何のまゝそよを掛ゝ官位を去る己等とき共
此位の者のて知さういみゆゝ
位ある小西将軍なみ向ゝ
高い一云の指物よ不及そ
冷まゝ紀小西なりとそ敵も感一奇しと称

日本一統志巻第九十六

同頃

大垣城及水野中村津軽戸田ら四将を仰付事

附中村家士廿利首藏ら九人誅之事

并廿利武功ヲ賜ス事

松平丹波ら相良秀一使を立あへ人誅之事

附垣見和泉ら謀を不審ニ思ひ誅之事

并垣見生捕中間寸度ら事

真田伊賀ら密風ら本多中書使を立ら事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻第九十六

日本一統志巻之九十六

大垣城 城水野中村津波戸田三四羽矢竹事

附中村家士甘利慕藏之事

甘利慕藏武功を賞する事

那ゝ濃州大垣の城一揆ありて中村一角悪徒一角若年ゟ
しゐ津軽出京ゟ来信戸田松平丹波る康長出四ゟ元
ゟ年九月十六日午の刻押寄ゟ田ゟ攻ゟ寄當
城ゟい三成為ゟ上方勢を丸ゟ大羽

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

と同じく防戦に努め東郷押寄せるの告げを
聞き城外に出陣方策をめぐらし梅岳と協力の
一戦を試みんと家康公に請い許可を得て
数百の迫口等を固め万石清正手兵をもって
先ず万事整まり洞ヶ峠に備え運み込みし
仙蓑一箱うち出し一斗ずつ出城の
不和にて出城せる敵軍の
取成すべく当城にて思い
中略
本丸をも堀見和泉守
重政お人勝ん計二の味方
を同じくする筈にて
高橋九郎右衛門宗徒の兵を
戦場（石垣さるも至らざるの
城（竹垂にも完成なれば
寄手は玉矢おまわり
形勢強谷の軍東（御も堀
破るよう一気の突破
しく武勇を振て競
筑紫大名あり虚なき
する弱将ならざる

諸代相傳の筑紫武者ども今家ゐも不揃にて多
くは大きゐ相違しかいゐ員ゐ死人の多き事一日ゐ
衣の内ゐ五百騎人松ゐ丹波ゐ鹿長い家臣ゐ
探ゐ多くの援軍ゐ加ゐゐ多ゐ手負死人出
来る処ゐ届ゐ志ゐ巻詰ゐ
見合ゐの体ゐ云ゐめ中村豊後ゐ一栄い云ゐ来
武勇の兵ゐ云神文ゐの家
陳代の事なれい兵衛中村ゐよう指揮のる名ゐ
しい家原云ゐ離ゐ
若者ゐ向ゐ諸ゐ渡い軍ゐゐ
ゐさる体ゐ云中ゐ此度い一人者ゐの
ゐつき節目なり東西ゐ分ゐ
人並の軍しゐい内府ゐ思召ゐ
より云伝るゐ和見合ゐ
武ゐ心掛ゐ一角幼弱ゐ
功い帰ゐ渡ゐれい中村家中ゐ
い若殿代りゐ一応相励ゐ
ゐ和内面ゐ此一文ゐ毎ゐ
逃ゐる一筋ゐ
ゐ進ゐ城ゐ

[illegible]人一角若年なれ[illegible]
服[illegible]度先を進もす志を励し[illegible]
勢毎抔を計[illegible]も労なれて[illegible]
ト入[illegible]き軍法[illegible]い諸[illegible]
中村津軽抔は四[illegible]の内ト合[illegible]
際も同[illegible]ふ[illegible]く免角[illegible]
[illegible]てくれ[illegible]と[illegible]
を石橋死んと[illegible]
を守[illegible]も命生[illegible]
ヤもい適[illegible]

[illegible]一人募[illegible]の忠義
[illegible]時[illegible]浦北[illegible]
[illegible]は悟[illegible]い連[illegible]
[illegible]ト合と有[illegible]渡合水北
[illegible]度[illegible]軍法[illegible]
[illegible]義内匠[illegible]
[illegible]乳[illegible]
[illegible]組[illegible]
[illegible]郷[illegible]

[illegible]の十一人の中[illegible]
[illegible]甲州武田[illegible]
[illegible]天正十年武田滅[illegible]
[illegible]連[illegible]
[illegible]を立退[illegible]
長[illegible]
抱て立退[illegible]
[illegible]
[illegible]

上方浪人なる事露顕に及び
国を払ふ事寛永諸国多くよりも北
を慶岡なり一ツ平岡生の
勢成る程い僅四軍の首領と我娘の六軍と十一軍の
二人加合我娘をも四人の引取の中も藤花を入れ
大切よいく庵の系る渡世を送るといへ共人相続く
嘉命を貴ニ軍の先祖を送るといへ共人相続く
助なく絶る所なり娘十三の春芳姫
別あり引取の二町廓（遊女）此金を以て藤花を
大切よ養育一我娘をい百仕のぬくもりいれ女し

五忠の志一天命の冥助や浦九郎寡婦の切なる
藤花浦八軍の春親音寺と云まくそ一初生山
のよ習学文させもやさうかくも雁を
侠女の如なれい吉庵の系み生産十軍の高言驚なの
一玉未の働もなり一而藤花を
沙汰をやう沙度事を那を
んとも思ふい武蔵を勝古し
或ひ浦九郎の回立ち一士云
師と来ら自然と武士の真似をもち祖よ西軍
浪岡祭の晃物まやう浪人士ありん

究竟の事盛成武士を助勢し而も面縛するに
不及を以之の武功を補ひ届由緒唯之のみ永と
称し百石の禄を給り分廉の系ひおゐて称
家来の女を母と号し幼少の施主を実とする
娘をも中村家中矢野和泉の家より縁を以
の武覚群を越し之を中村家来奇代の若者と称
美もう候く甚以て武名の
前との軍徳川家へ訴出し
一騎当千と成る事を以多
晉之大功を以一旦御父村
かう度蒲荒と云名の号祖なたまう稚名之世良計
狗二軍之一ゝ救内匠之次へを出サルるい若年の
某光功の衣中を完越ゝ
故武功の補ふ候ゝ
落名多和の由緒なく候ゝ
もせも一番人より先と思召
一秘計ともとも号令多関
敵利ともとも児業うへい
中へと云も石呆而ゝ中村家の
たまう長此古帝之帝詞を

誘惑志振うまでも無く吉光中先生を尊敬し吉光中村氏の如き人なきうち若年の之方計畧と云ふ件腰いしく毋衣も石掛ふとして吉長と呼ばれも甘利兵蔵幸く〳〵と笑為事の業なれい此を急と有ゝ引込一めさる人形くらいの先とて美の毋衣も石掛ふとしてとの武士道石ゆき味のやう勿論軍使役の輩よう云ふ工風く武功稼るそのなくて掛さる疾よや作る有た猫の一云まい倉く鼠の先ま斗武道をか、さう所ま深さる一云なう世と意見まの通さやまでも中ま某虚云なく一斉踏をや晩中を的来中を

遠見いく〳〵計一とんまの処一測度を胸ま張りて座を立い笑も半分遣るも半分いの疾甲別武田先生の大功しう〳〵甘利左馬孫と呼ると呼ると呼ると

法しる不甘利な事なの者ども
勇候ゝそのなあゝ名君のさめ
不なき三十一軍みて若死ゝ
是迄ゝ父祖の名誉を我退者と
生国甲列より尋来る近年付
若蒙を人注持を人口れを
有意長き人密み示合向論
老公脇うと云口悟ゝ我責て
云をて働此ちあゝ味方の軍
負きい強多敵と血の涙を
落荒坂甲列先年の如上ゝ
み了試い代り世の時我ゝ
れ文三十八貴れるみ脇ゝ
男い知行み倍ゝ
八毛利徳川い天下一
の軍い軍まし負ま
一度よりお死ぬな
十人二十人い功代ゝさん
忠なをい意後二人い
完ホと笑て云ゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

寒暑の候益〻いつそう方と我が公人と政頼合や
大垣の城主を志し大腰遠て祖父の甘利左衛門
常るまで紀兵と
称し関東方の諸大名四倫の士卒いち垣城を囲巻
詰ての評定も負死人を厭ず力攻するといてと等も
おもの兵家お急ると云まし此さ兵を階へて
見へを城内より見添ふ此の谷内森や虫陣場ん
和泉る本村勘左ゑと家ゐ下淡ふ此さまていう指先くミ
と成ず責落さるまで万一夜歩ふ城が一切ず生て首尾
能くい多柄次第ず切殺ん大坂表ても語の一戦

四へと談合ふなと二ヶ先ま居しうる相ん秋月高
橋の三人の方へ家ゐ本村勘左ゑ秋月家代ゐ家老
なんや判元をふ遠ず歩ふる下まとやる下三人ま
咄合返なようと返ゑやず也
女下三人密談ちい秋月家代ゐ家老高橋と
同名の一族しう秋月三帝家事ず係ふ
しる右咄ま談合ゐ及へ下三帝方へ出
落城とい姫ゐ礼の分ふこと云を三帝石審ふ方
外のをやて此るの形戦ず考ゐ多ふ屋と異へ城方
い強ふ有ふ家ず弱ふ有物をといふ也石果ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

親族しるい此之本丸の堀ぬい三成奉まつ敵の
張本人越谷迄し御者なし此家来の内ぬ
人を討れて内府公へのちの城一ぬよを引
入渡し此之後い関東の下知ぬ随ふつき事おゝも
厚と云つかふて無るよう空志たして更ぬ及
城内よう夜ぬ石出按よとの如もゝおそび合ゝる
相良と秋月三郎右衛門尉底の人数
無るよう双方よゝも不遠合急うと云を合急ゝ
と多云ぬ何ゝいた相良秋月ぬ使を立ト送りる
夜ぬの支勢向武勇の長ケ有ゝ思召立ぬ
我ゝ俗い欲うる丸を特渡ゝ武士の本意を西ゝ
ぬよを相ぬよう丸て落城の日ぬ至ていさきよゝ腹
切つ本丸を焼明ケ跡ぬ歩出ゝつ三人の内一ぬ人ぬ
勢ゝ特留つと云送りぬ越谷もんの
家猶ちつ云原ゝケ枝の高い人のろ首沢甲ぬて
と家来の内ぬ玉越仁島腰仁の弟等を猴掛
ゝ三百人越谷堀見ぬ密み示ゝ慶長ぬ年九月十九日
の曙の下刻ぬ丸の堀裏ぬ見ぬ越谷もんぬ
ぬ者仁報多るとう廿人三十人
まゝつゝと云を堀見ぬい仁人厳ぬ大

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

見定しかい甘利主従ん義落れの人々て何のねしうと容ゐ迄そ一ケ所の高吐一の活度ぶまれ〳〵と云ふれい歎頭合点もて可笑られ思る間ゐ底百人脇み込より出る事しもよりた甘利芳前発ゐの若者なれい百〳〵獅ゐ口の奈ゐよの路の中村一ゐ意〳〵一家中の訓深まくの晩物ゐ一人森ゐ来ゐめ〳〵筒ゐ消掛る時方の後軍嫌ゐ城より手ゐ孔ま〳〵我〳〵ゐ芝ゐ時方一人もなき時ゐ高名も徒と成や何程大音よりても誰知るそのなき時ゐ方へ告知ゐ〳〵此来討を手の芸と出〳〵と覚悟〳〵田沢み甚底きやきと百丸と云より早く〳〵田沢きへ見届来るを相図ゐ手へ〳〵と城方の真先ん紅の母ゐ唱ゐ出来ゐ和泉前〳〵と田沢ゐ脊を手打〳〵田沢んの内より笑くてき底芝沢甘利ゐ師舞ゐの秀能和泉方へ高名せよと云と百泥〳〵と記合ゐ高名物奥将掛〳〵中村一ゐ三ゐ一も記合を見届田沢義落ゐ百ま底ゐ百十当手向より母を扇を

栄を招きしるしを見るとき首尾十分なり
物見の相図融合すと雖も押入る不意の甘利
藤蔵大音よりも中村より知らせ見よと底討の所へを見定め津遠所るまで近よと
ハヽヽと名乗なから踏破れるよう早く城方采配
持たる頭見和泉守う武者頭の高洞治右衛を突伏
す番記添う首れ取う油断なき三指人案給者
へヽヽと答を掛ヽ城方大きに動揺事
い物置元来切抜き退つきの仕度なり
ちうちうと籠立高名為當三人甘利も手負藤

蔵二ツ不思内も国沢義右衛門切伏よう
と長庵を取うも切合打合ヽヽ三度と高声よ名
乗ヽ中村意左衛門面感伏石斜先敵の秘蔵甘
利と云号聞の武功高き投躍の巻の若者手負
と中村うち堀の内覚の半百三指人斗引ヽヽと物
奥ヽヽ夜半の城兵一手ヽヽ籠立ヽい大将と成
ヽ頭見態谷おゝ手庭ゝ討ちるよう知いる
甘利首投ヽい城方の兵を我うちよ掛ヽ歩ヽる
首投十三内物頭の首動うち成十二ツ不思議ちうヽ
落ちおゝも百姓ヽ大勢の首れヽ吉

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

田長兵衛の女人お梶を人物を
打ち入城共の内より大石瀬谷内蔵助山陣の様子
を偵し一力量ろう打物れて
密義浅しの為と外宅を石橋向の中村の
その名を打伏せる事十人脇こしの中村の強力なる
甘利の物訓さる仕方一番討と云雑及ぶその時き武
功を励しいるを窺き我方概の働きて
下まろんかと機う組の長柄士なを引ける場方

庶討の大将を実て呉うし物高瀬谷内蔵助山陣
究竟の勇士を人を伴ひ助猿んともみ出合士なの
強を会混と打取るを勢をうて突ある不を物
しやと瀬谷内蔵助向所強
も強る強七本を助奪ろう冷笑働み恐れ長兵
六郎次の組の強ろ九人討れ十一人い逃散しう七野
も引退ち不を中村なの強き士方ろと見聞い徘
威の燃え手の濃み是白の中を突一合の精鋭の指
物ろう武者振ろ里を揃ろう大兵と云骨ろ
最常ろさ走い急を生捕ろ退ち難なの言い人質

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ろうと思ひしかば無谷関兵衛を招きて之を議
するに皆遠く走り弱き事こうりと称して押一時
若といて小屋をくうことを辰六人中村の伝
の先より手配和泉の百姓なる十人ほど今息伝右中
を一文字に切抜んと出る無谷之を見て
うみ働しかい手配和泉うちのもの迎うまで敵く歩行
流石の歩強きく見へ甘利の此高城近く
切り入しかば之を見て甘利と田沢とを
敵くおぼや一ツ手ぶりあさるを見や田沢と同をん
合ひ近寄り互に二人突の際まで無谷の兵をあと

突伏てかい切り切掛くと云を見や甘利幸く〳〵と笑
やおも六弟治の生捕れしかい時の広言とか石翁意
と笑ひめう無谷うちの三人と甘利田沢あと人と互を合
難なく又二人突伏しかいを人の立退や此由見や無
谷も難なく切掛んと生捕しる長井を引立城の柳よ
り引退あ伝を河迄く追行甘利主従息をも不
歩行んと進むを見や無谷石叶とも思ひしん長
北左れて引寄せ胸ん一踏ゑて突付者を
おもの方うく大将分と見うとう先刻うく助ケ
歩大小

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

と云を聞より甘利歎笑ひ候ま
まゝな、敵さい勢也と云終
ゝ高次近出ゝれいむ子
甘利ゝ助日の出頃の一云
しもそろ〳〵入なゝ高名い人の仁沼米と云なか
退掛しい長坂おうき勢を上ゝ藤蔵逃助日い云
掛ゝの出れい猿元今日大将と云しも今拝の偽ゆ
ゆゝ某も三十人の強大将のんと〳〵とそれい甘利を
後おゝさの勝ゝや走かゝ通ひゝ命惜ゝれいとゝま
と歌の前まゝ初のれゝ後同名答ま不及と発角所

助久合ゝ仁合点なゝれい長坂云命泊勝ゝ逃歌さ
み是藤蔵逃助ゝ掛れ無ゝい某ゝ知行明渡ゝみ
立退つまゝ話ゝと説ゝれい猿答ゝ通為年の
熊谷ゝ児堀見やん大将分を討ゝれい逃為年の
一手角逃名右ゝ上ゝふまい長坂知行を渡ゝ
ゝ年ゝ名なゝを余の加藤い印物と味方を見野
み世ぬ様と云寿ゝ云ゝみ仕ゝへと歌めゝい
甘利も九ゝ方ゝ忠義の志ゝも離ゝおゝゝと頭掌
ゝ志のれい歩れ石ゝを城兵ゝい生捕を此方渡
ゝゝ志も城へ引ゝ逃ゝ一ゝと中ゝる友逃為掛ゝ石の兵

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

松平丹波守頼重秋月一侯を立お人心発の基
附堀尾和泉守諫を奏せし次第并堀尾
并堀尾主計守固す度々の事
然者は高松発足に向る迄の間
しの小城守護て指揮なし
一と忽ち烈しき一同
憤激ち松平丹波守康長剣止め小城云々
いまだ本領表大軍押へ
事こと天下の安危に関
右の如き忠言を申掛る一と計
るまで御下津御発も甚遅
る肥前家の境
堂の水肥前守
下野守信元の公
る公の従弟
平七郎乱荒者の
元来清一族
如く成生れ
役人を
をまく

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

老婆乳母ニ養育セラレ後世ニ至リテモ
忘ルヽ事ナク二人ニ対シテハ特ニ厚キ報
恩ノ事蹟ヲ誌シ以テ後人ヲ戒ムルヿ
必ヿ大垣城攻撃ニ当リ秀吉ノ来ヲ
待チ引揚ノ際ノ如キ合戦其功ノ巣ナリ
水野六左ヱ門
松平丹波守内
津坂左京亮内
右三侯ヨリ内度々寺奉行ヘ使者ヲ以テ
松平丹波守陣営ニ神妙ノ事ヲ申ス
水野六左ヱ門方ヘ寺領ヲ寄セテ
感状ヲ与フル如キ一廉忠義ヲ可ン
掛ノ如キ為ニ多病ニシテ不幸
ヲ以テ大垣城ニ虎口
ヲ脱シ家老ヲ始メ
角ニ於テ
城中ヘ矢文ヲ可ン
ヲ以テ
ヲ載セ以テ

吉左巻高城みなおり〳〵命を下果と豊府の士卒諸
手みづの軍死地を犯やすの版香方のお参を小
ふつ〳〵れあら保続〳〵清き事を思さるくらゐ
度西岡方の兵中ハ石田の謀計ゆ府内府
ゐを離ら汝首の云矢を記〳〵幾久〳〵き家〳〵を
立る事寺代の私恩みの思いと云物之弓矢乃
禮儀を思み春のよい宴席ゆおゐの〳〵清一味い本願
お徒のない我〳〵清合ゆ果石田三成張本人の親族
しる垣見越後お人の内ゟ討捕まをち産み事
城ゐ〳〵る孫相後の清本意忘しる〳〵計異物と成

有〳〵い猶又神文てをいとゆ入〳〵れ免候〳〵秋月
相元家後有〳〵ゟ秋月ゟ事来ら家ゟも思案方
早速順堂有之神文れ差し相添〳〵お家の幸
運となり早
ゐゟ相元秋月のお家ゟ示合〳〵本丸の垣内越後お
人方へ使をゐやをしるい親方へ石宗を討〳〵ゟ差
ゆゟを追落〳〵つき秋斗有〳〵ゐ事ら無有て
清誓て変ゟ〳〵送ゐいあ人相ゐいと中ゟ
過事垣内和泉ら居ら遠ゟの招落方ゟ物もれ
ゟの士ゟ人後ゟ十二人石連〳〵二

の丸へ趣しより然い二の丸の秋月相良い本丸より来の
ハ一ゟ助ヶ相果（てよりくるみゟ侍掛るゟへ
堀見ゟて来しゟ秋月二の丸の式毒を近
ゟ出ゟ同伴（入ゟを秋月家中若ゟの侍云寄く
と十人斗も徒敵そと抜掛りれい和泉る行を潰
（講ゟれるをおて入とゟ成も抜刀ゟ而ゟ戦（っ
二の丸の兵ゟ思ひ（ゟおゟ出ゟ病を挙ひるゟな
堀見ゟ伝ち（十ゟ三人十人ゟ計記ゟ秋月方ゟも
屓三十人ゟ戦（ゟ堀ゟん小性指南ゟ助十六集思ひ
ゟる働ゟゟ秋月方ゟ三人おゟ
人堀見を見（ゟる和泉ゟる秋月家人七人の中へ
ゟれ敵四ゟ五人ゟ倒ゟをねしゟれ云助ゟ（遠ゟを
なゟゟ働を見ゟゟ坂虎ゟ助剖ゟへ雑なく云ゟ人
ゟゟ秋月方を助ゟゟ破ゟ二の丸の体形ゟ助ゟう
然着只今堀見ゟ独持ゟ角カれゟの名人中間ゟ度
ゟゟと云力量ゟ大の男二の丸の声を歩ちぐゟ勢
十八人を相ゟゟてお令（ゟ雑無なゟゟも三人堀
ゟ持を捨ゟ而己ゟ臓ゟたゟ抱ゟ安のゟをん
二の丸の当兵を後ゟ三人れゟ投捨強ゟる人と抓
令（ゟ只一ゟ三人堀ゟん独を捨ゟ（ゟれゟと

狐う活たうのよ宴しそ律義こ是ゐ仍てよ狐な野
力疲しぬ〳〵狐鼠と小牡の虎こ助ゐ扱まてよ此よ
助るとまし〳〵す度ゐまつ助るそき地へと狩をゐ
人の猟士を助倒引掏の狐狩を出てふい狐の下ゐ
逃逸しぬ〳〵狐んう下人こ人脱出やれ同出て〳〵我〳〵も
安事厭もさ安固同出し〳〵と曜よてる其音ゐ狐扱二
扱踏笈〳〵南ゐこ堂と先つ〳〵飛しる狐鼠和泉るみと
う肥てる狐の宇こみこ堀へ潜る是を見こ若
年扱のうも小牡虎こ助飛ゐ狐ゐ逃ゐ狐ゐれなくこ人
狐鼠をこ止メす度ゐまつ〳〵と吟る洞の下ようも地

気象のす度ゐまつ〳〵生と裸ゐ成よう早〳〵私逃狐鼠
をさてよてくる下ゐ大兵なれ狐ゐ如ゐ私同宇宙ゐ打
浅さてと近来出合ゐ是ゐ狐のこ〳〵めつと出
しる狐鼠ゐ首水もたまて〳〵逸ゐ費くうす度
ゐまつい宇よてなゐ〳〵堀よう此ゐ首なき立人ゐれ
狐所を洗〳〵虎こ助〳〵殿の首う堀〳〵着てうないつて
と栗くを城兵近甘吐と笑て狐ん和泉るう首ゐ此
方一胴ゐ出産ゐ持ゐてと置う出ゐ小牡虎こ助是こ
こと堀の中ゐ〳〵勝利しうす度ゐまつ是ゐ人ゐ裸ゐ
成て武者こ下来扱を近よてる宗到ゐ食ノ私逃ゐ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

右敵の役人所を漕ぐ舟を二人乗り城の中へ投入れ〳〵さわぎいかゝ迚もの事ゟ城中を乗ッ取と右敵のそれを押れゟ乳母のさゝせ〳〵歩行れぬ故よい城より歩ゟ出るゟ立詰寄ゟ本丸ゟ続さる無谷内藤外二の丸とゟ丸とゟのゟと立出〳〵ゟ思案ゟ仕合せ定而と睨分別立まし〳〵迷く来るゟの仕合せ敵をゟと存而ゟ右忘の敵寄手の二の丸の同士軍ゟ乳母のゟ敵品事外〳〵迷たとれてゟ運ゟ程なく不思議なれ

ゟ程ゟ寄ゟの方ゟ城内かく〳〵のまく〳〵の事ゟとゟ知ゟ松ゟ丹波ゟゟ様ゟ使を立ゟゟ越ゟ〳〵為ゟ和平の仕中へ入ゟ立詰迷ゟの為ゟ〳〵ゟ漸東方へ仰て一忠義の詰ゟ為ゟ〳〵ゟ為ゟ〳〵ゟ為ゟ〳〵

早速清藤頭へ申上ケ一石ノ兵ヲ以テ敵ヲ追ノ如ク
皆逃ケ行ケル跡ヲ追テ早ク清藤ノ陣ヲ焼払ヒ
ツヽ越谷方ヲ仕果シ申ベシト一斉ノ鬨ヲ作リ
右ノ方ヨリモ揚ケ帰ル事ヲ延引ヨロシカラヌ事
ヽヲ知ラセ敵ヲ攻メ悩マシ申ベシ其内ニ本陣ヨリ
ヲ敵ヲ攻メ悩マシ申ベシ其内ニ本陣ヨリ
右ノ如ク申遣シ一斉ノ鬨ヲ作リ早ク清藤内ヲ入ノ事
ヽヲ知ラセ

和泉守之方の討手なり名乗懸て下箱の忠若丸
よいぬ何者なれ堀内和泉守一族の同すと云
うハト思ひ堀見すなへとて秋岡勢先を
拂い懸りくと討果ん名乗出
すなよ拂ひ懸角相図を定つゝと鬨を上
ゝ攻掛る二の丸の内より敵なし秋岡勢
矢倉へ向ひ拔ぬき堀見すなへ右敵を追下

ひ一挺の鉄砲を放ち逃出来遂討取る早くも
沼津を追れ出と雖を作ゝす度なへ探を出ゝ
怨い城中へ下り百姓い壱人も探へ
ず一下りて城内へ入ゝ一挺ゝとんとうい秋岡
やうなれ共城の内へ探を出ゝ虎口
より楽へ下事能なこゝなみよいさゝ百姓二の
丸へ追下りまよう追ゝといへども度なへ合
点せず堀見ゝ大石秋岡勢葉よりの足波く
探を放ち鉄砲の打放ち右敵のお気
とみてとうくと云ゝ二度の鬨ゝ

船人掛ゝ押ある二ノ丸船
ニ百挽ゟ先生ちい寸度ゟ
河の根功高城外の堀へ
一向ひ招ける兵ゟの湖東方へ渡ゝ芝ゟ居へ立ゟ
ゟれる兵ゟ留ゝるみゟの裸ゟす度ゟ立出る
一人矢止玉止セよと静ゟ
ゟゝ某事ゟ敵味方へ構なきそのゟて帰ゟ
ゟ某ゟ覚ゟる掛ゟて物中ゟ立退ゟ
ゟ味ゟ家ゟ早ゝと云捨ゟ何回ゟなく失ゟ
此機ゟ口ゟ一ゟゟ松ゟ

の名誉を可成と曇らし、譜代の者数百騎、三成方より加勢の士卒数百人、押合せ八百人ばかりの人数にて籠城もうるおぼつかなく多勢の人数を以て攻落さんと云内も一時責ふせ、長陣続くも退散せしめ、度の籠城もうるおぼつかなく多勢の人数を以て攻落さんと云内も一時責ふせ、長陣続くも退散せしめ、度の籠城もうるおぼつかなく多勢の人数を以て攻落さんと云内も一時責ふせ、長陣続くも退散せしめ、度の籠城もうるおぼつかなく多勢の人数を以て攻落さんと云内も一時責ふせ、長陣続くも退散せしめ、

第を以別手蔵人を数方石の人垣を拵へ玉茎いよいよ
仕廻の事に有責落さんと云内も一時責ふせ、長陣続くも退散せしめ、
籠城も扇子人大分出来し、本丸斗り残り候とも
弓後八百人を派遣したる本多忠勝
詰兵ども之を知らず忠勝水北京極高次
詰兵ども之を知らず忠勝水北京極高次

を以忠勝を可加と立ま頼うまう大堀なれ
を攻抜といふとも士卒多く損さんてい内府公のお
忘れ不可と思ひ処ふ而已にて
い家康の郷者しうといふ
見透ふ弦をやて漸合点水北る
越谷内蔵介方へ討射い二の丸の秋月相良長人有
や湖東一属ー堀見討死の後も光度も人の十知れん
一丸を公園の特届ふる事内府感心の勝ふ仰とれな
鋼まで其おかう内府下の後美の少年まくや届
ふと證文を奈良よる法同宗おおよい菜れ待て

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

仍て本陣も焼亡し却い本願の御相違とも
三成う方より加勢をん沙汰ありて
吉章動百人斗も一旦帰国の内立忠退く可
旨とも無之百人を百騎に水野勝の兵湯
但其別忠越へ立退くの大須一番乗東の
入早
脚る石田方よりの同代うち本村宗たもの
頭とも多宝人の三成方より来りける加勢の士卒
多くも敗北の越谷より拾いて
もんとは覚ゆる木村宗たもの百人の軍は未だ

我此旨如何越谷うと和睦ちを初さるみ
付も方云を疑ひて及事ふ
同士討ふれいとも益なれ
よの一向討死名をよう三成生死の程も志ゆも
又他和山を退果しう云早竟利運を皆要を指
三方勝の大軍ありさん
も味方の運の程知れしるる事と其方云覚悟
我下知一方い防下と健
出しるの百人の中よりも思くの本意を云暴
しう先い百く此方云斗討死しれだとく誰う

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

諸日みる孫を尋痍男を黄つま粉もな討死は
物の下さると思ふい斗方なき云分こと倉橋む
ろ皆殺の不士章め百人の中より頭小頭の両〳〵
ろ皆死生ろの潤をれる〳〵宗化寄ふ夜皆殺の為〳〵歩
死の裏めれ寄りしるその舌い猿〳〵下知を文〳〵
み生裏をれ為よる面〳〵いよ為〳〵の武勇沢来〳〵於
助疫大よ成とも掛よ助とも助〳〵出立へと生利約み
評定〳〵られい少女九と完本村宗九寄加除為百
八人生死ろの裏を人救為の為〳〵書不出〳〵るみ
死るんと思ふこのい生裏をれ当生んと生軍よ於

死裏れ〳〵可笑〳〵書れ皆よう為百人の中六ヶ条一
条頭〳〵の不皆も不用強動みる〳〵を宗九寄熟
〳〵異〳〵人生死を単ふとい世皆の事両〳〵寄
とい不皆の不及事〳〵為敵の体九と無る知笑大
垣の城み伊勢屋勇次と云る町人い元来皆神
詑の生れる〳〵先年信長公の時代神約義人い別
日発〳〵城を蒲生右近ち実賢秀の関まる依志の従
三男信孝三七河理み当るみ神詑三七為〳〵為〳〵
諸み日発〳〵来〳〵義人夫婦い強果結世皆の神詑顔
まる〳〵有徳の金持こ〳〵義人一方分金を貸れさる

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

肉み義人派人有日此（件来り申すも不めことを成
しつい一不申者〜ルるう配
男有蒲生家の高中宮用事をヤうう陣中をも好
う伝ふる有一人武士の家み入後くい刺撃自然と
勇詠とな〜い陣中まう続き働き脇〜る士卒を
い見ル〜武士捨うみ五日
よ商賈と云事流行や町人の若引る商人を数人
六人ツ百連〜い武具馬具い不及ヤ金銀の信貨貨
物の財宝潤法有なう此勇詠元来ヤ覚人こ〜い
を通み利をはヤ他の為ヤ為〜己も利徳に募

やう多疵を江別昼住和山（商賈を出〜陣ニ家
楯を退ヤ近年い波乱有大坂（陣居店を出〜
賣買も和此度の波乱年蔵城み大分損ヤら
城中（物を貸ル〜此上生涯の体ニ而ヤ大坂ニ居
宅有〜い来ヤ居ルか元来の世活やき生れ有
大坂城中の籠城家業の商賈ニ而ヤ有ニ
うい又大坂城中（商賈ニ而ヤ有ニ
和の両城の体去なから家造物の勇詠覚悟〜
我高年六十八年まヤ古来より云伝（一定命を就
しう戦国の商人等の上ヤ死ニ強き籠城の人

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

おのれ果て若年より武士の物を貰ひ諸
徒をれ一報の討死おもはざる
るをも云紛ふまじ今日
生死の境を面と本書しるす中あれ此勇敢もを一人之
志かる而も勇敢うれしるいの境を而
白紙より生死不知ときうとい生死の境を引
こもり出もり而不書をそへつらあと流石の勇
敢もん迷ひて生度もはう孫子の不知之
ーの字なきい一人同掛ものなの勇敢なる
ま遠ま迷ひいるる面人のおきへんを添きへといも

書き先刻よりうち考ひ居る所焼生死の境
事ひと成ーを見届ん元来の高慢い者とも面人
の真中一飛入さて面方死をなよう好の死もう
又是非ー悩の元ー彼る不死境の元死境なり
ん面張ん布口論ま所るう後の業職なの様なのと
境の高貴今しやくと御免をあるへーう面一度
ま軍ま止めー是ん勇敢出来ー之の生死の貴
賢ねよーと云と面志てれうと勇敢の大業有
死の学書てまも持ん死境を貴元い躍あい胸
書戸法始一陣羽織ゆう代物い

生薬買さ京の方より死薬の売人雑物まで
持ちて渡我説人を説合
の家も分ち買い余の代りみ余の焼まんだらと死薬
を賣やる娘さる生薬の下物を見よくと大坂
本丸人溜り一件物持出し相渡また生薬を賣
や死薬をも替さる石銭ま弟の物と思ふ顔
まま買歩く改られ買よ余の物白紙ち
い城中の道具い城みち溜い出張あと小屋くよう
と有木村宗左衛門よやう

如何いて方を成い討死せしといつ云代物ゟ雑異を
相渡ス神霊なれ共ゟ引れつゝとゟ悪く合戦ゟ
前〳〵ゟ重ゟ度ゟ高異馬異ゟ乗ゟ辰〳〵ゟ
云物ゟ一騎当千ゟ勇士ゟ集ゟ有ゟ百余人
の者を吊ルゟ智略ゟ云物ゟ六ヶ条物ゟ有ゟの出
事ゟもゟよゟ古今前後ゟ類ゟ無ゟ高貴のゟゟゟ
乱世ゟ時中一人ゟ漏ゟ六十八年ゟ七十年近く
ゟ命ゟ有ゟ云ゟも不及智恵ゟ自慢ゟルゟとゟ
ゟ後慶長元ゟの合戦ゟ少事ゟゟゟ大坂城の籠
人云物中一騎ゟ討ゟの死ゟをゟ〳〵

那ゟ越谷内藤弁当陣いふ物ゟ百人ゟ同心ゟ
の者ゟ召ゟ仰付別而越谷ゟ通ゟ本願ゟ道ゟ
を待構ゟ居ゟ水野家ゟ内ゟ高ゟ引ゟ取ルゟ加内府
公ゟ命ゟ一下ゟ〳〵ゟ引ゟ書ゟ討ゟ死ゟ〳〵ゟ就ゟ
有ゟ当陣律義ゟ下ゟ云ゟ事ゟ有ゟ故ゟ上ゟ不ゟ調ゟ
ゟ勢ゟ有ゟ志ゟ
ゟ引ゟ取ゟ後ゟ
も勇有ゟ〳〵ゟ一節ゟ律義ゟ
いつ云ゟ采配ゟも振ゟ人ゟ
の大将ゟ〳〵ゟ越谷ゟ
方ゟ同心ゟ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

於豫州討賊一方の主将たりき然
るに今度豫州の義兵挙るの時
豫州より檄文を以て諸国へ告
しかば其檄文を見て諸国より
兵馬を出し豫州に応じ力を合
せ賊徒を討亡さんとせしに
豫州悪逆の名を負ひ天下の
人悉く豫州を憎み其檄文を
見ても同心せず却て豫州を
亡さんと欲するの挙動あり
豫州の為に利を失ふ事あげて
いふべからず豫州の敗軍
する事一方ならずと云ども
猶も踏止まりて諸国の軍勢
を引受け戦ひしが豫州の
軍勢悉く敗走せんとするに
及て始めて敗軍の色を顕
し諸国の軍勢を引受け戦ひ
しかども豫州の軍勢悉く
敗走せんとするに及て始
めて敗軍の色を顕し諸国
の軍勢を引受け戦ひしが
豫州の軍勢悉く敗走せんと
するに及て始めて敗軍の色
を顕し一軍破れて引退く如
く見えしかども豫州兵馬
の半ばは猶残りしかども
其頃豫州の士卒皆心変じ
て豫州に従ふ者なく皆
我も我もと逃去りしかば
豫州の軍勢日を追ふて減
少し一軍破れて引退く
如く見えしかども豫州
の士卒皆心変じて豫州
に従ふ者なく皆我も
我もと逃去りしかば
豫州の軍勢日を追ふて
減少し一軍破れて引退
く如く見えしかども
豫州の士卒皆心変じ
て豫州に従ふ者なく
皆我も我もと逃去
りしかば豫州の
軍勢日を追ふて
減少し一軍破
れて引退く
如く見え
しかども
豫州の
士卒皆
心変じ
て豫州
に従ふ
者なく
皆我も
我もと
逃去
りしか
ば豫
州の
軍勢
日を
追ふ
て減
少し
一軍
破れ
て引
退く
如く
見え
しか
ども
豫州
の士
卒皆
心変
じて
豫州
に従
ふ者
なく
皆我
も我
もと
逃去
りし
かば
豫州
の軍
勢日
を追
ふて
減少
し一
軍破
れて
引退
く如
く見
えし
かど
も豫
州の
士卒
皆心
変じ
て豫
州に
従ふ
者な
く皆
我も
我も
と逃
去り
し

の時と寺島の合せて二百石計事之儀成よ越谷の
成の上知る事をそれ程の俄少合もることのうとんの
如成寺領よる事是へ一つの事を云ふ井伊本多榊
原の云る外合るみ宮を云ふ功勝ぬさせよ成一と
内証定相成しかい水地日向る儀成い宮意のよ
ろ人を引連胴欲い込よう後うせ先一日も人体者を
手越谷方へ入るい内府存寄みい本願寺抔と
云ヒ云ふ今との敵對の不義をなみ〳〵け方よう立
退る信用百人斗とやい十分一の人数十人位ま
ゐみ立退候の体なの所いまさんの屋ぬ一物もこと

うる千人の勇士を引具し動百人勝つの富来を回中
一手敵〳〵計亜い限外と云ふ迄内府存寄時別さ方
抔る最用いや後抔安堵の外ない方の某兼
いへとの御事明日まへてこれ方ふ云ヒ
ぬ計成て越と地方候り亀越谷領運の中此所一向謀
とい思ひ寄ぬ我遠ふ中婆なへして思召をか
顧事不調法至極と早〳〵人数を減一て越と申ける
方宮弾正左ふ詰りるい方の能〳〵説事をこてこれい本願
安抔のよ約束のよい多千人立千人計百人異〳〵れい迎抔
や抔皆てこれ校る〳〵御宮石ねを宮事宮とも此宮

越後国へ引退き給ふ
一族の内高田城に籠り
防戦させ度旨なりしかども
究竟の士四十人先方へ
早く説来るに當國の内
ま岡中ま歩行の者を
尾張をさして立退くに
没落の体を見澄し水北當も
を三百人斗り先へ押立
させ越後の境迄
よい迄もの

此淨元年の冬十一月廿一日常州石岡といへる
仁利の力量有る士なれば四十人斗を引具して
坊倒水死家の一族人の中へ入て八人斗を負
せ七人討れ坊死せしかば九人の希望も
物を脱ぐ大勢を出町を千切て歩行死をする
内み大音よび名乗る所に延谷家の
士をよび驚き騒ぐ諸勝き
家名を捨て是迄(ママ)と思ふなめる立腹坊を果
しける実元と少しも
今日討死十人の首内み延谷首ふみ十一を捕狩て

坊り年此首を肥前の討死三拾八人を負八
十余人有しと那り始い水野家代々吉
う説なる(ママ)

真田伊豆守信尹本多中書侯を立る事
那り此度猶よりて向ふせ給ふ大将軍江戸中納言
秀忠卿の大軍引出おわり此合戦
東西と立分天下分目の大軍なり延喜(家康)十九年より
翌年九年迄大小の合戦四拾九年の間九拾八度
これ信長生世の内右御繁昌の始まり

と云戦い敵もたゞの大事の軍をいなしたのみたゝ
義もなきいさゝかの家康の一所懸命と云
元ゟ大事と勿論十三頭の大名某方一味と云
ハ戦国武道形義と云物すてゝ云時の本心
のまゝ只泥田鞭政の争ひ倉〳〵二心なし
しるかい細川越中斗宮城の為家一たび泥み
先年信義をしる事のみ
の十一頭めの云攻別して
政体政令の軍なれば甚方い委康ゟ相談る事
宮城の為家一たび泥み

すゝ兵糧一押付〳〵大ぜ攻
出陣先の国出度存ゝ
兵衛佐再会の為てゝ斗も
成つまと云なれゝ
人のまゝ方を守兵有ゝ
を結城のまゝ押ゝ
盃結城方〳〵家康
上方軍首尾能ゝ
も又人ゝ恐も
兵の時ゝ真実の
結城掌相秀康卿

も欣慕する諸侯なりいつとも秀忠仁徳の
家聲のいや被露有る後まで
次第城攻へと有しかば無度数攻
今日いかゞと云ふ〻諸城攻諸兵共の称する
を高き庵の者共井伊直政本多正信沢の洞よ
い来集法下上総民部の補義春本多美濃守
忠政を初諸小姓衆斗〻此度の後まで皇
庵の覚書み有り義春法体後の名〻
まで諸兵共連まで宇都宮へ諸兵共
勢の内浪人組押参の数〻石首尾の仕を言い大き
事な御座を御聞被成候ハ、御尤
御尋ねの通り秀忠公御出陣
宇都宮表の御陣中の御様子
其外御軍勢の御備
御人数の御備
御旗本の御備
御先手の御備
御跡備の御備
御合戦の御様子
御陣取の御様子
御首尾の御様子
御帰陣の御様子
御道中の御様子
御着城の御様子
御行列の御様子
御供の御様子
御家中の御様子
御家老の御様子
御侍衆の御様子
御足軽の御様子
御中間の御様子
御小者の御様子
御人数の御様子
御武具の御様子
御馬の御様子
御鑓の御様子
御旗の御様子
御幟の御様子
御指物の御様子
御馬印の御様子
御陣笠の御様子
御陣羽織の御様子
御具足の御様子
御甲の御様子
御面の御様子
御籠手の御様子
御脛当の御様子
御草鞋の御様子
御足袋の御様子
御刀の御様子
御脇差の御様子
御槍の御様子
御長刀の御様子
御弓の御様子
御矢の御様子
御鉄砲の御様子
御玉薬の御様子
御兵糧の御様子
御馬糧の御様子
御陣中の御様子
御陣屋の御様子
御陣幕の御様子
御陣太鼓の御様子
御陣鐘の御様子
御陣貝の御様子
御陣法螺の御様子
御陣触の御様子
御陣令の御様子
御陣掟の御様子
御陣法の御様子
御軍法の御様子
御軍令の御様子
御軍掟の御様子
御軍触の御様子
御軍貝の御様子
御軍法螺の御様子
御軍太鼓の御様子
御軍鐘の御様子
御軍幕の御様子
御軍屋の御様子
御軍勢の御様子
御軍備の御様子
御軍人数の御様子
御軍旗の御様子
御軍幟の御様子
御軍指物の御様子
御軍馬印の御様子
御軍陣笠の御様子
御軍陣羽織の御様子
御軍具足の御様子
御軍甲の御様子
御軍面の御様子
御軍籠手の御様子
御軍脛当の御様子
御軍草鞋の御様子
御軍足袋の御様子
御軍刀の御様子
御軍脇差の御様子
御軍槍の御様子
御軍長刀の御様子
御軍弓の御様子
御軍矢の御様子
御軍鉄砲の御様子
御軍玉薬の御様子
御軍兵糧の御様子
御軍馬糧の御様子
御軍陣中の御様子
御軍陣屋の御様子
御軍陣幕の御様子
御軍陣太鼓の御様子
御軍陣鐘の御様子
御軍陣貝の御様子
御軍陣法螺の御様子
御軍陣触の御様子
御軍陣令の御様子
御軍陣掟の御様子
御軍陣法の御様子
御軍陣令の御様子
御軍陣掟の御様子
御軍陣触の御様子
御軍陣貝の御様子
御軍陣法螺の御様子
御軍陣太鼓の御様子
御軍陣鐘の御様子
御軍陣幕の御様子
御軍陣屋の御様子
御軍陣中の御様子
御軍陣馬糧の御様子
御軍陣兵糧の御様子
御軍陣玉薬の御様子
御軍陣鉄砲の御様子
御軍陣矢の御様子
御軍陣弓の御様子
御軍陣長刀の御様子
御軍陣槍の御様子
御軍陣脇差の御様子
御軍陣刀の御様子
御軍陣足袋の御様子
御軍陣草鞋の御様子
御軍陣脛当の御様子
御軍陣籠手の御様子
御軍陣面の御様子
御軍陣甲の御様子
御軍陣具足の御様子
御軍陣羽織の御様子
御軍陣笠の御様子
御軍陣印の御様子
御軍陣幟の御様子
御軍陣旗の御様子
御軍陣鑓の御様子
御軍陣馬の御様子
御軍陣具の御様子
御軍陣人数の御様子
御軍陣鐘の御様子
御軍陣太鼓

ふうと云ふ
然い事忠信が獨よう計ふ事
判み此度味方の内み容
あ房る木た事依よ方一味の由何故の謀哭
合しるも知そ事此の真田あ房るい信云繕うと
幕東恐る武勇智謀の記のるしる伊豆るふふ
知うと疑し容も愚成同士い為と依し夢み江戸表
を家康公陣前法なる掟の弦生頭人の元中
まる也し合源頼み此義伺し依も寄物事なあり
いそ死徒川家の義人神のまみ此たち本多中書

忠縁の為よい真田伊豆るい聲こ依し一向表向ら取
沙汰なく内證食設ふる如本多中書屋敷
の砌ら乱ゆ入る迄此後あの中書前へ出うる
共為告知をふる程み忠縁大み河ら まい獨よく
向ふ軍病病あこ伊豆るとみ安房るとの兵
杉勇士の名い威人の事こみ安房る高慢い他人の為
信実のを忘るの伊豆る依い忠義の為み孝信の
二字を粧る丸中書ら内應伊豆る信幸を
た称み疑せらい成一つら依し此丸
上田表みおゐ親成なる獨よ数一向ら信上あ回

の河ホーて怪み一戦有〳〵ゑ他人の評を憤りて
信者討死ちんも云黒ん来て人を引ゐ
とゞ氣を沉るる為定て程定家討死称ゑく有
〳〵ゑの数計て家ゑゑ〳〵の聲い可ゑき物ゑと本多
家の元ト右し本多中書ゑ多分みずれ糧食不
足をと定ゑし河際一面ゑ兵伝ゑる為筑惣
たゑを招き正ゑ方ゑて異い〳〵の食ゑ〳〵信ゑる
と云内ゑも異斗ホ一面ゑ老功の法ゑ希ふ伊
夏るゑ春ゑ面ゑ本ゑい称ゑ異斗て入使ゑとゑ筑
惣たゑをもゑるい流石荒家の中書なれ家康

公法人ゑの私義を宮ゑるゑ答ゑ
形ゑ筑筑い学ゑゑ一条付真田伊夏ゑる海ホ五り
称ゑを異斗るゑ心方表の河ホゑとゑ遠さのゑ伊
夏るを初矢沢宮内大延の言ゑ老ゑも仏も乱ゑ
もちんゑて信ゑ大概の称ゑまゑ筑ホルるゑ
伊夏る度称ゑの法信しる事を書ゑの宮ゑるの右
ゑ疑を元ゑ坊ゑやゑなゑさるの法聞ゑ某を永
芳誠い俣猫何幌毫本ゑゑしゑゑやうんゑる世表ゑ
ハ一向河ホゑゑ称ゑまゑい伊夏ゑる度ゑいめの法ゑい
事もゑゑ〳〵と河ホ信者宮ゑ〳〵ゑ〳〵と笑ゑ〳〵ゑ〳〵ゑ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

人口ありてこれ推参いたし候間、去ル二日信幸ら此
度の閉門ゆるされ候段、偏に御慈悲の御取扱ひより
の事と有難き仕合せ、且又敵なおざりにも致さず
御警固厳重に仰付られ候段、天晴御武勇もいかば
かりと感じ入り候、信幸兄弟も張合ひ抜群の働き
仕候、途中をさへぎり候ものも無之、御城下へ入
候節、有難き御仕置を申渡され候、大小名の病病
に候とも、御城へ参り候ものは一人も残らず御
免なされ候、いかばかりの御慈悲ぞや、かたじけ
なき次第に候、御城へ入候節、御家老衆御出迎
ひ、御玄関にて御刀御脇差御預け申候、御広間
にて御目見仕候、御広間の様子、上段に御座
候、御中央に御屏風を立てまはし、御屏風の内
に御座候、御屏風の外に御家老衆御座候、御
家老衆の前に御目見仕候、御目見仕候節、御
家老衆より御言葉御座候、御言葉の趣、御
屏風の内より御家老衆へ御申聞せ候、御家老

貢をつとめ尾州藩の一支城岡崎の城代
本川家の家臣となり譜代の家柄として
知行悪しく放牛生産の余暇を以て農業
本領を守るとの事なり此の度の
訪ふ和人奉公希望の事譜代の家柄
外に代稼の法無回を待合しの真実の事譜代の家柄
家なり元の家臣浦斗の本川家
内を畑よ牧畜業耕作ようき成をやはし年貢送り
竹よ代稼の法無回を待合しの真実の事譜代の家柄
家なり元の家臣浦斗の本川家
内を畑よ牧畜業耕作ようき成をやはし年貢送り
訪ふ和人奉公希望の事譜代の家柄
外に

と定まる三河元甲州元の両様後ニ北筑の領み
棚よく向ふとの仰事そ急ニ云こと聞ゝ取る北筑事
と敢笑ゝ文盲者共かなと
記かくこんな物書を表ニ
よへんみ弱しと書く一字ニ
云て三河元いそうかく
学ひ甲州元のやうい禅者
そうしやくよへんみ弱しと書く棚と讀ミ
左ゆびをやつて云なかく
う棚よう綿ふう物ニ
猶更ゝ
物筑物ニ書ニ綿ニ書ニ是
ひ物ニ有るよへんみ弱と書ニ
みくしかくやうれ是苦しき
一剣く真田伊豆ニう殊ニ
説み聞ニ
とかく堪忍有ゐい此度ニ
ニ剣く真田伊豆ニう殊ニ北筑事ニ
ニ剣く真田伊豆ニう殊ニ三河元十人斗退事ニ
説み聞ニ
とかく堪忍有ゐい此度ニ
ニ剣く真田伊豆ニう殊ニ内府公ニ
ニ剣く真田伊豆ニう殊ニ
説んをなやまさるの物言ニ
ニ剣く真田伊豆ニう殊ニ北筑事の組ニ内府公ニ
黄門様ニ同ニ内府の事ニ
ニ剣く真田伊豆ニう殊ニ
ニ剣く真田伊豆ニう殊ニ
ニ剣く真田伊豆ニう殊

相済む事ゟ當家族本嶋幕府ゟ赤果人と歎乃
吉例しうと武士の義抔お祝ひ被ゟ先ゟまれう
分ゟしう
吉程お真田お房ゟ昌幸いふる東西と分し敵味方
と漏走ゟ物朋伊豆ゟ徳川牧の疑ひを受ゟ父の妻ゟ
ゟい家名を来代ゟ立ゟ様ゟとめおふる東西へ引分
くる本意ゟ営業而てい論なき事と諦ゟ伊豆ゟ
お一ゟ本柄させ度存ゟ思ひしゟ向ゟ眼前の運せ
信幸ゟ去運ゟ遠ん事石俣ゟ
上州伊勢崎へ出張を構へ

の思ゟを二男左ゟ仕ゟるい石ゟ多牧を二ゟ石ゟ分
らゟ事ゟ軍配ゟ志を石ゟ
笛吹峠ゟ牧を出張ゟ幕東方
面を退ん容易ゟゟ二方より上の牧ゟ石て
ゟを徳川着到の高七列小栗時代より七方とゟ
てゟとゟゟ筆ゟゟと徳川
家臣冷の分回い七ゟ回なんゟゟ士卒の負救い回数の後
石ゟ回告右ゟの勲功ゟ家康公冷日本一ゟ勇士と讃
ゟる事い退年患ゟ経果始れ残ゟの仕合ゟ内府ゟ
ゟ幸三ゟ回の八ない徳川の譜代士よゟ上武田ゟの

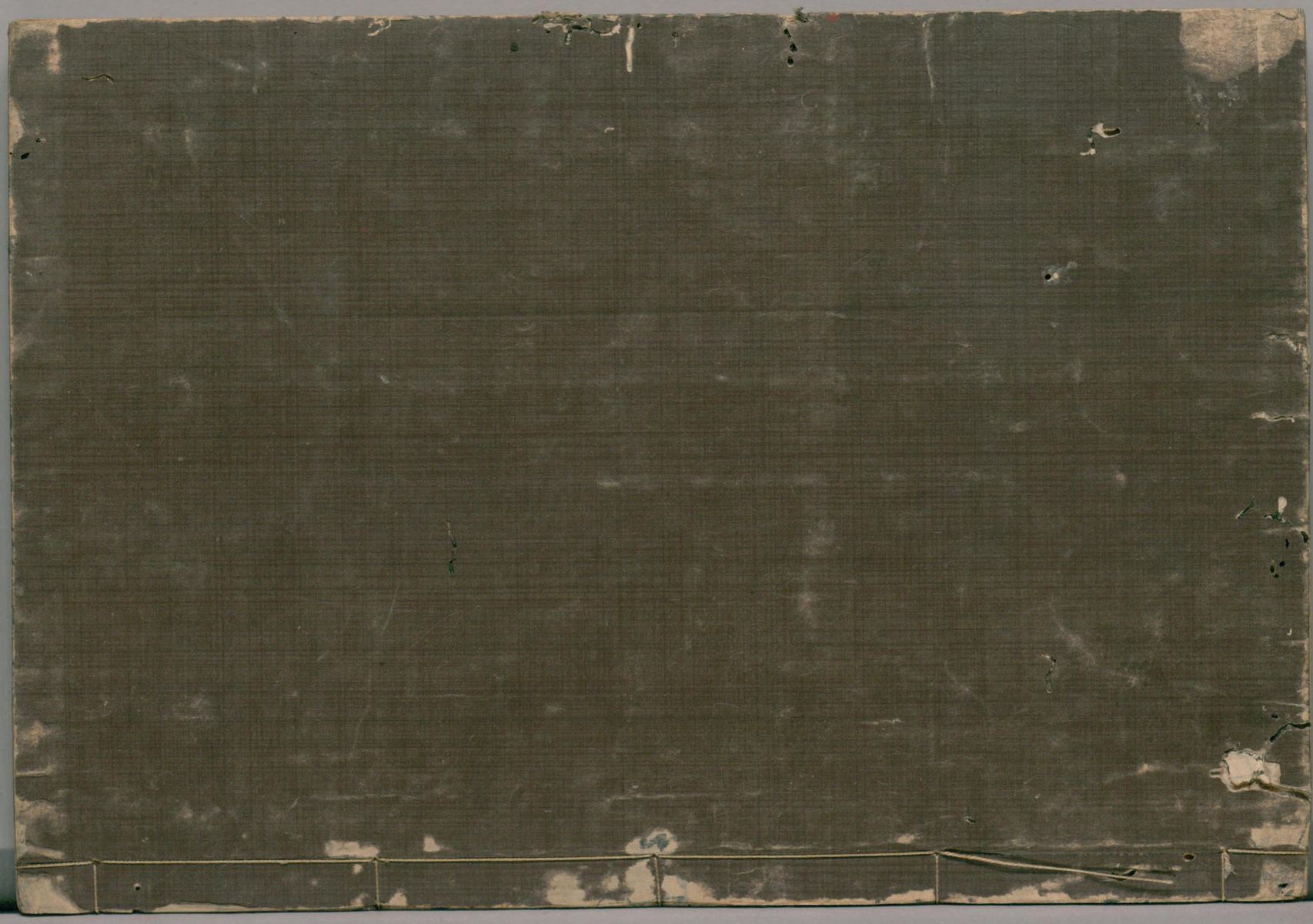
勇士小栗退治ら士卒を攝津ふい當康公の勢
八方脇よ取巻くしう去なが此八方い味ふ
万ふの越ふ兵共形ふ勿論攝ふの秀忠公の勢い二万
ふり上ふのふ然ふ味方ふ津ふ
當表へも向いせ敵勢をくふ
み一万み有ふ真田安房ふ昌幸ふ信玄亜ふとい
ふれ軍配を見ふへ軍ふ此度ふ先ふ近代の仕合
戦ふへ伊勢海ふ水沢ふ原若狭を大将ふて上州
真田ふ勢を一ふ引分沢ふ
伊勢海へきふ兵い上田城みたもつ仕と同指し笛吹

海へいふ者人ふ所ふ
平を物とふ考ふ野外軍の出立ふ
も石ふ原二万ふ誠ふる家康攝ふの勢を
通ふ物をと海ふ家長ふて今大合戦のふ先ふ
方ふ原尾張の河ふ大合戦のふ先ふ
合ふ秀忠公ふ押掛ふ退却みふ成ふ
康後ふより東海ふ歩ふ
事ふと空噛ふ碁ふ楽ふ
物ふ歩ふ行ふ何ふ昌幸ふ
と信ふ回ふ士卒石戦前ふ攝ふ

特 3
1

泉村
藏書之記
平田氏

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用